

シユリと、黄色いエゾキスゲが見頃を迎え、観光客を喜ばせていた。原生花園に咲く花は年間約70種類。生育が厳しい海岸砂丘に根をかけた自分たちの居場所を確保してきた。鳥や虫も交えた食物連鎖の営みがあるまま、時代ごとに移り変わる原生花園の姿になって私たちの目の前に現れるという。

「北海道でエゾキスゲの群落があるのは小清水だけ。日本ではオホーツク海岸にしか生息しないカラフトキリギリスが花粉を食べにやってきました」。ピンク色の花びらが美しいハマナスの茂みは、外敵から身を隠したい小鳥たちにとって格好の安らぎの場。バラ科独特のトゲを嫌ってキツネも来ないため、安心して子育てができるそう。他では見られない命の共演が、川崎さんの解説で明らかになっていく。



1

1. 植生を回復するため、毎年5月の連休明けには「火入れ」が行われる。
2. JR原生花園駅は5～10月の期間限定営業。ログハウスの駅舎が愛らしい。
3. オホーツク海を背に遊歩道を歩く。運が良ければクジラが姿を見せることもある。

2

イラスト：川崎 里実
「ノゴマ」Luscinia caliope



希少な野生動植物の保存活動に力を入れている川崎康弘さん・里実さん夫妻。

3



地元の野鳥研究者と歩く
小清水原生花園・濤沸湖

「多様性」という名の宝物

オホーツク海と濤沸湖の間に横たわる網走国定公園小清水原生花園は、小清水独自の豊かな生態系に恵まれている。小清水町出身、在住の川崎康弘さん・里実さん夫妻も、さまざまな動植物の命が織りなす四季の姿を楽しんでいる。

Treasure in the Name of Diversity

Koshimizu Town is home to Koshimizu Primeval Flower Garden, which is located along the Sea of Okhotsk, Lake Tofutsu, one of Hokkaido's largest stopovers for migrant birds, and the 1,000 m-high Mt. Mokoto. This environment provides the natural habitat for various animals and plants.

海岸砂丘を彩る原生花園
鳥、花、虫の命の共演

「ヨシキリが鳴いていますね。ほら、聞こえますか？」。ピロピロツという高いさえずりのあとに低音のジジジジと続く夏鳥の声。肉眼でとらえる間もなく小さな鳥は素早く移動し、次に聞こえてきたのは「ノビタキです。頭は黒く、胸はオレンジ。ヒヨロリーヒヨロリーとまったり鳴いている」。大自然の舞台では声の主役が瞬時に入れ替わる。どの命も「ここにいるよ」と教えてくれているようだ。

2015（平成27）年6月中旬、小清水原生花園は例年より早めの花の全盛期を迎えていた。あたり一帯の案内役を買って出たのは、小清水町に住む川崎康弘さん。日本野鳥の会オホーツク支部の支部長を務め、鳥類全般の環境調査も行う、オホーツク管内きっての《鳥

博士》のような存在だ。

首から双眼鏡を下げ、肩に大きな望遠鏡をかついで歩く隣には夫人の里実さんが。同じように双眼鏡を下げ、川崎さんの著書『北海道野鳥図鑑』（亜細亜社・共著）を手ガイドのフォロイをしてくれた。

1957（昭和32）年、網走国定公園の一部に指定された小清水原生花園は、オホーツク海側の海岸植物と、濤沸湖周辺の湿生植物からなる群落地。国道244号線沿いに約8kmにわたって広がり、なんと海側の原生花園の《中》をJR釧網本線が通過するという北海道らしい雄大さで、オホーツク観光の人気スポットになっている。2004（平成16）年には「北海道遺産」にも認定された。

JR原生花園駅を起点に始まる遊歩道を川崎さんたちと一緒に歩く。町花でもあるオレンジ色のエゾスカ